HRW2014

第10回ヘルスリサーチワークショップ

オープン参加者公募

第10回ヘルスリサーチワークショップのオープン参加者を募集致します。

ヘルスリサーチについて多職種で語り合う「ヘルスリサーチワークショップ」にはこれまでに延べ222名の方が参加し、国際共同研究・国内共同研究を初めとするヘルスリサーチにおける連携の足がかりとして様々な成果を上げており、関係各方面から高い評価を頂いています。（第9回（2013年1月）の様子は当財団機関誌「ヘルスリサーチニュース vol 61（2013年4月号）」をご覧下さい ＜当財団ホームページからご覧になれます＞）

今年度も第10回ヘルスリサーチワークショップを下記要領で開催することになりました。参加者は約40名を予定していますが、オープン参加者（公募による参加者）を下記のとおり募集致します。新たな**「"出会い"と"学び"」**の2日間に期待をこめて、是非ご応募下さい。

第10回ヘルスリサーチワークショップ

テ ー マ： **縮む時代の先に幸福な社会を拓く**
ー ヘルスリサーチの巻き込み力 ー

開 催 日： 2014年1月25日（土）・26日（日）

開催場所： アポロラーニングセンター
（ファイザー株式会社研修施設：東京都大田区）＜予定＞
参加者には追って詳細をご案内いたします

参 加 者： 約40名

公 募 要 項

参加費・宿泊費無料

オープン参加枠：6～7名程度

参加要件： 下記分野の将来性ある若手研究者またはヘルスリサーチに関心ある実務担当者(年齢は不問)。
共通言語は日本語（国籍は不問)。尚、動機書の提出と推薦者が必要です。

1. ヘルスリサーチ分野
   経済学者、統計学者、経営学者、社会学者、心理学者、人類学者、哲学者、教育学者、法学者、倫理学者、医療疫学者、保健学者、医療マネジメント学者、医療情報学者、医療政策学者、医療システム学者、ゲノム医学者、など
2. 保健医療福祉分野
   医師、歯科医師、看護師、保健師、薬剤師、ケアマネジャー、カウンセラー、理学療法士、作業療法士、介護福祉士、社会福祉士、ケースワーカー、ソーシャルワーカー、栄養士、など
3. 行政分野・メディア分野
   保健医療政策の立案担当者、保健医療政策の実施担当者、メディアの報道担当者など

申込期間： 2013年6月14 日（金）～ 7月31日（金）＜当財団事務局必着＞

選出方法： 申込者多数の場合は、幹事・世話人会にて選出。
選出結果は2013年9月下旬に本人に通知予定。

申込方法： 財団所定の申請書式（当財団ホームページからダウンロードできます）に必要事項をＰＣにて入力の上、当財団事務局へ郵便でお送りください。また同時に、Wordファイルを E-mailにて、下記の当財団メールアドレスにもお送り下さい。

公益財団法人ファイザーヘルスリサーチ振興財団

〒151-8589　東京都渋谷区代々木3-22-7新宿文化クイントビル
Tel：03-5309-6712　Fax：03-5309-9882
E-mail ： hr.zaidan@pfizer.com
ＵＲＬ ： **http://www.pfizer-zaidan.jp**

第 10 回ヘルスリサーチワークショップ
縮む時代の先に幸福な社会を拓く
ーヘルスリサーチの巻き込み力ー

趣意書

2005 年に第 1 回のヘルスリサーチワークショップが開催されてから、今回でいよいよ第 10 回を迎える。このワークショップでは、ヘルスリサーチの研究者、ヘルスリサーチに関心を持つ保健・医療・福祉分野の実務者を中心に出会いと学びの場を提供し、常に新しい何かを始めるきっかけとなることを期待して開催されてきた。「より『健康』に暮らせる社会にしたい」という参加者の思いに支えられ、研究者・医療従事者・行政・メディア・法律家・市民をはじめとする多職種が出会い、多面的に医療や社会のあり方を語り合う場が育まれてきた。参加者の間ではワークショップ終了後も研究や実践が次々に生まれるなど、新たな価値を生むネットワーキングの場にもなっている。

今回は、「縮む社会」の中で、「うまく縮む」ために、ヘルスリサーチができることを、ヘルスリサーチの「巻き込み力」という視点で考えてみたい。

戦後ほぼ一貫して右肩上がりだった日本の GDP は、1995 年に初めて大きな減少を経験したのち増減を繰り返し、以前のような持続的増加を期待するのは難しい。温室効果ガス削減目標や一昨年の震災以来の節電要請は産業や経済の成長に強い制約を課している。日本の人口は 2005 年に初めて減少し、高齢者人口もほぼピークを迎えたものの、世代間のバランスを欠いている。経済や財政は右肩上がりの成長段階から「縮む社会」の段階へと手探りを続けており、一定の枠の中での配分を論じている。医療費をはじめとする社会保障関係費は国の一般歳出の 50% を超え、限られた資源の中での取捨選択を求められている。

感染症や外傷の治療が大きく発達した 20 世紀、医療の充実とは病院の充実であり、医療施設や医療者数の拡大、最新技術の普及といった「拡大」が医学の進歩であり、社会の発展であった。しかし、高齢化社会の疾病構造は変化し、地域で疾病を抱えながら生きて逝く人も増える中で、健康観は多様化した。1993 年に病床数の総量規制を定めた地域医療計画以来、急性期医療から在宅・慢性期医療・介護・保健指導へと構造の転換が急速に進み、医療のみで健康を達成することは難しく、その役割は相対的に縮んでいる。

また、医療の高度化により同じ総合病院であっても機能の差が広がり、さらには医師の偏在も背景として、従来のように基本的な急性期医療を二次医療圏単位で完結させることは困難になってきた。人口の分布も医療資源の分布も異なる都市部と地方を、画一的な医療計画で形作ってきた既存の医療政策の効果や役割も縮んで見える。

では、今後の医療のあり方をどのように考えるのが良いだろうか。

一つには、社会の様々なステークホルダーとの連携が今以上に求められるように思う。例えば、複数の健康に関する問題を抱えた高齢者のニーズに応えるには、従来の病院医療よりも在宅医療をはじめ地域連携の充実によるすそ野の広い「生活支援」が適している。画一的な医療計画に代えて地域の知恵を集めるには、医療者がその実践を様々な形で分かりやすく発信し、主体的に自身の健康観を確立して健康づくりを実践していく地域の住民を巻き込むこと、また同様に地域住民が主体性をもって医療者や行政を巻き込んでいくことも、欠かせない。

もう一つは、「見える化」である。医療以外の分野に目を向けると、例えばエネルギー分野では発電技術の進歩や代

代表幹事

猪飼　宏

幹事

石田　直子

幹事

岡崎　研太郎

幹事

藤本　晴枝

替エネルギーの開発もさることながら、今後はスマートグリッドに代表されるエネルギーマネジメントシステムが一層の最適化を推し進めようとしている。農業においても、IT を経営管理に活用することで、生産の現場と市場のニーズを直結して品質や経営の向上に活用する取り組みが進められている。

医療政策の分野でも、地域ごとの需給を詳細に把握しながら、住民の健康観も反映した議論の中で、疾患ごと・地域ごとに医療提供体制のあり方を論じる取り組みが進んでいる。疾患毎の生涯医療費を推計したり、患者の受診状況や医師の偏在を示したり、など医療者の視点から具体的なデータを挙げて個々の課題の要点を明確にすると、広く住民や社会を議論に巻き込んで、新しい医療文化を住民とともに合作するための基盤になるだろう。

このような現状のもと、「縮む社会」に向けて「うまく縮む」ために、ヘルスリサーチの役割にこそ「巻き込み力」と「見える化」を提案したい。

実は、これまでのワークショップのテーマの中にもそのヒントがあった。第 1 回から順に挙げると、「赤ひげ」「少子高齢化社会」「終末期医療」「医療崩壊」「グローバル社会」「プロフェッショナリズム」「ソーシャルネットワーク」「ヘルスリサーチ」「地域」。良く見ると、年を追うごとに医療から社会へと視点がシフトしていることが分かる。

ヘルスリサーチは医療や健康づくりの場における様々な問題点を明らかにし、あるいはそれを解決する様々な試みの成果を明らかにしてきた。その際、問題点を解決する新たな技術やツールを生み出すだけではなく、そこに参加した実務者や患者や地域住民を巻き込んで元気づけているのではないだろうか。

実務者や患者や住民が現場で抱く悩みを踏まえてヘルスリサーチャーと共働することにより、自分たちの日々の活動の延長線上には予想もしなかった分析結果や解決の糸口を得られるかもしれない。例えば標準化された調査や統計解析の手法による的確な現状分析は、解決すべき課題の一覧とその優先順位を整理してくれる。課題が一般化されることで、課題の解決方法に向けた新たな知恵が見つかるかもしれない。医療にとどまらず、他の分野での成功例を部分的にでも応用できないか、ヘルスリサーチャーの知識と人的ネットワークが役に立つ場面もありそうである。

ヘルスリサーチとの出会いにより新たに展望が開けるならば、それがさらなるリサーチマインドを育み、次の研究へ、より具体的な活動へ、よりよい社会へと人々を駆り立てる力を持っていると信じたい。

そこで今回のワークショップでは、医療・保健・介護・福祉の現場および住民の視点からヘルスリサーチに寄せる抱負、研究者・市民の視点から医療をよりよくするためのアイデア、ヘルスリサーチの今後のあり方に関心を持つ行政・メディア・司法の方々など、それぞれの熱い思いを大いに語り合う場にしたい。

それぞれの立場は踏まえつつも線引きにとらわれることなく、自由にアイデアをぶつけ合うことで、これからの「健康な社会」をデザインできることを、楽しみにしている。

第 10 回ヘルスリサーチワークショップ幹事・世話人一同

世話人

山崎　祥光

世話人

佐野　喜子

世話人

朴　相俊

世話人

渡邉　奈穂

世話人

豊沢　泰人

敬称略

幹事・世話人からのメッセージ

代表幹事　猪飼　宏

京都大学 医療経済学分野 講師

マイカーを持たずにカーシェアリングを使う「脱所有」、クラウドコンピューティングに代表される「機能経済」など、所有を伴わない暮らし方には新しい豊かさのヒントが見て取れます。
後発品や病床削減など倹約ばかりを語っていると疲れてしまいますが、医療の世界でも規模の追求とは異なるスタンスで、診療所に遠隔医療を導入した仮想病院、在宅診療にネットワークを活用した仮想病院の実験など、質の向上に向けた様々な模索が始まっています。
医療現場の課題を持ち寄り、ヘルスリサーチの視点と組み合わせてアイデアを膨らませることで、次世代の健やかな社会をみんなでデザインするきっかけが生まれるのではないか、と楽しみにしています。

幹　事　石田　直子

インディペンデント・エディター

ピンチはチャンス。経済や物質的な限界を知り、身の丈に合う暮らし（縮む社会）を模索すること。それは、かつてGDPの拡大と引き換えに失ってきた、大切な“なにか”を取り戻し、なおかつ新たな豊穣のステージへ向かう過程なのかもしれません。
思えば、人的ネットワークや精神性、困難を乗り超える叡智とモラル、ユーモアには際限がなく、私達はこの10年、ヘルスリサーチを合い言葉にWSでそれらを紡いでまいりました。これからも多様な人材が立場を超え、健やかな未来を熱く創造する場が続きますよう、そしてますます多くの花を結び、社会の豊かな実りとなりますよう、祈念いたします。

幹　事　岡崎　研太郎

名古屋大学大学院医学系研究科
地域総合ヘルスケアシステム開発寄附講座

「医学は普遍的なものだが、医療は文化に規定される」。こんな言葉を聞いたことがあります。そうであるならば、「医療は時代に規定される」と言ってもよいのかもしれません。少子高齢化が進行した2013年の今では、病院での医療よりもむしろ介護、保健、予防、在宅、地域などのキーワードの方がいっそう重みを持ってきたように感じられます。このような状況下で、さて自分にできることは何だろうか。同じ問題意識を抱えながらも多様な職種・バックグラウンドを持つ人たちと、ヘルスリサーチという切り口を通して濃密に語り合う2日間。この体験が、次の日からの自分に何らかの変化をもたらすことを期待しています。

幹　事　藤本　晴枝

NPO法人地域医療を育てる会　理事長

右肩上がりの拡大社会は、発展のために不足している物を見出し、サービスを生み出す「ないもの探し」の社会でした。
しかし、拡大社会が求めてきたものの先に、幸せはあったのでしょうか。
翻って、少子高齢化・右肩下がりの社会は不幸せなのでしょうか？
社会が縮む時、私達は「あるもの探し」をしていきます。
ひょっとしたら、そこにこそ本当の幸せや豊かさを見出すことができるのかもしれません。
私は、その一つが、地域住民の力だと思います。
ヘルスリサーチが住民を巻き込む力とはなんでしょう。
それは、これまでプロが培ってきたノウハウを、生活者目線で見直すことから生まれるのではないでしょうか。
この2日間、皆様のアツく素朴な語らいに期待します。

世話人　山崎　祥光

井上法律事務所　弁護士

医療と法律にかかわる領域でも、高齢化と一人暮らしの急増により、新たな問題が出てきています。たとえば、身寄りのない高齢者の判断力が落ちてきた場合、医療行為の選択を誰がするのか？入院・入所などの手続をどうすればいいのか？成年後見などの制度がありますが、後見人選任に2～3か月もかかったり、医療行為の選択は後見人の職務対象外とされたりと、行き届いたものとはいえません。大きな政策の話も大事ですが、個々の現場発で改善していく動きもとても大切かと思います。
第10回ワークショップ、さまざまな現場から悩みをもって集まった皆さんが、お互いに刺激とつながりを持って帰る場にできたらと考えております。よろしくお願いします。

世話人　佐野　喜子

神奈川県立保健福祉大学

〈縮む〉という言葉から、「疲労や劣化によって弾性を失ったゴム」と「大きな瞬発力を発動する前に力を蓄える所作」をイメージしました。医療者がめざすものは、まぎれもなく弾みのある幸福な社会であって、伸びきったゴムではありません。様々な規制がかかる社会だからこそ、実務者とリサーチャーは向かい合うより同じ方向を見据え、その関わりに折れない‘靭やかさ’を蓄えることが求められています。同じ立ち位置で協働できることは何？そのために巻き込むものは？…熱い2日間であることは間違いなさそうです。貴重な出会いが強い結束に変わる魔法が今年もかかりますことを願って、渾身のサポートをさせていただきます！

世話人　朴　相俊

公益財団法人身体教育医学研究所　研究主任

今の時代、私たちは歴史上（?）最も大きな変化や包括的問題に直面していると思います（食糧問題、健康や資源、気候と経済問題に至るまで）。まさに、産みの苦しみ中の産婦に例えることができるでしょう。2013年5月、ローマで発表した国連の報告書がこれを短篇的に表し（昆虫は将来、最も優れた食糧資源で消費を増やすべき）、突破口のために世界中が悩んでいることがよくわかります。健康はどうでしょうか。健康問題を解決するためにより新しい医療へ挑戦するでしょうか。それとも、過去の歩みから知恵を学ぶようになるでしょうか？どちらにしても、「何に気づき、何を守り、何を続けるべきなのか」への真剣な熟考がなければ、今回のテーマのような**「巻き込む力」**の秘訣は得られないかもしれません。

世話人　渡邉　奈穂

東京慈恵会医科大学　医学部看護学科　基礎看護学　助教

現代の社会において、少子高齢化や労働人口の減少などに伴い、医療費や社会保険関係費の増大、医療サービスの地域格差などさまざまな問題が生じています。そのような厳しい社会を生き抜くために「いかに幸福に生きていくか」について私たち一人ひとりが向き合う時期にきているのではないでしょうか。このワークショップは、全国のリサーチャーや実務者、地域住民が集い、参加者誰もが肩書きにとらわれず、自由に議論できる場です。「縮む社会」の中で、人々が「いかに幸福に生きていくか」ということについて、分野の枠にとらわれずお互いに知恵を振り絞り、とことん議論し、参加者の方々にとって今後の活動のヒントが得られるワークショップになることを期待しております。

世話人　豊沢　泰人

ファイザー株式会社　経営政策管理本部　執行役員本部長

記念すべき第10回HRWは、「縮む時代の先に幸福な社会を拓く」という、既に訪れた高齢化社会の一員として考えるべき貴重なテーマと感じており、ワークショップ参加が楽しみです。
社会保障が、財政的な意味合いだけではなく、社会の重要な部分を占める時代になりましたが、高齢化がすでに到来している地域においても、社会の未来地図はまだ見えていません。
現在の社会保障政策を形作った戦後の日本も縮む時代を経験して幸福な社会を目指したはずですが、その頃に描かれた未来地図は使用期限を過ぎています。
私は、この縮む時代に改めて、幸福な社会とは何かという根源的な課題と取り組む、ヒントと仲間をHRWで見つけられたらと期待しています。

（敬称略）